



「ノリ葉上のアリア」

独立行政法人水産大学校
理事長 鷲尾 圭司

今回は、私たちの生活に身近な「海苔」の上における生物多様性について、水産大学校の鷲尾理事長にご執筆いただきました。

明石でノリ養殖のお手伝いをしていた頃、ノリの大敵として付着珪藻があった。アマノリが元気なときは気にならないほどだが、ちょっと元気を無くすと付着珪藻が葉上に密生し、やがてアマノリの活性を奪ってしまう。ノリ養殖の黎明期からの難題に対して、先人はノリと付着珪藻の乾燥耐性の違いを利用し、厄介者に対して「干し殺し」という乾燥を与えてしのいできた。しかし、乾燥はアマノリにとっても厳しい条件なので、ノリの生長を抑制してしまい、収穫が思うように得られない難点もあった。

あるとき千葉県の漁師が炭酸飲料をノリ網にこぼしたところ、気がつけば付着珪藻が消えていたという経験から、酸性処理剤の利用が普及していった。この冬も日本海沿岸に不審なポリタンクがたくさん漂着して話題になったが、中身は塩酸で、韓国沿岸のノリ養殖業者が使用済みの酸性処理液の容器を海に流したものだろう。わが国でも安全な有機酸などをノリ養殖に使用している地域もあるが、容器の回収が義務づけられているために、こちらではあまり目立たない。

さて、便利な処理法ができれば、付着珪藻が出そうなときには酸処理が当たり前となって、もっとももっとも効果の強いものが求められ、より強い酸性液が使われていった。その結果、一番優先する「リクモ」と呼ばれる三角の扇形に繁殖する珪藻はほぼ根絶やしにできるようになった。喜んでいたところ、今度はタビュラリアという直方体型の付着珪藻がわいてきて、これには酸処理剤も通用しないことが分かった。通用する程度に強い処理をするとノリもやられてしまうのだ。まさにノリに良かれと思って取り組んだことが、あてが外れて「ありあ！」という結末だった。

付着珪藻の中にも生態系のバランスが働いていて、生長力が旺盛で安定した環境で大繁殖するものは、その他の種類を抑え込んでびこる。弱い種類はそんな時には地味に潜んでいて、存在感を見せない。しかし、環境が変わって大繁殖種が追いやられると、下草に甘んじていた種類が天下を取るようになる。下積みの暮らしが長かったため打たれ強いので、酸処理にも負けないのだ。

こんな種交替を見て、自然の力をより強く認識したものだ。厄介者と思った種類でも、生態系の機能としてとらえると、その存在意義はあるもので、安易に人間の都合で整理してはいけないことを思い知った。

それからは、酸処理は海苔製品に影響が出ない程度に抑制して行き、葉上の多様性を残した管理手法へと適応していくようになった。

